

## ワークライフ・バランスの段階

企業経営漫談士 岡野実空

今回のコラムは、昨今の研究会で例外なく話題となる「働き方改革」に関連して、「ワークライフ・バランス」の3段階(滅私奉公、公私分離、公私融合)を取り上げます。その意義は、先のコラム(E-2)の「会社の人から社会の人へ」のひと言で総括できますが、今回はそれに、肉体、頭脳、感情という各種労働の特徴を絡め、それぞれの段階がもたらすプラス、マイナス両面を具体的に考察します。

### 段階1: 滅私奉公

サービス業を中心に、世界に類を見ない「過労死」の悲劇が止まりません。私も20代後半から30代前半にかけ過労で二度入院し、うち一回は切腹を体験。そこから悟ったのは、「身体を壊すまで働く必要はない」ということ。単調な肉体労働や過大な頭脳労働、さらには unnecessary な感情労働に振り回され、一度しかない人生を台無しにするのはバカバカしい限りです。

高度経済成長期、あまりに過労死が発生したため、地元に残職者の共同墓地を作り、話題になった京都のハイテク企業がありました。高野山奥の院なら、各社の墓地に埋もれ、恐らく記事にもならなかったはず。そんなことでも目立ちたいトップがいる企業に間違っただけで入ってしまったら、さっさと脱出しましょう！いまなお続く「一将功成りて万骨枯る」悲劇の犠牲となられた方々に、合掌！

### 段階2: 公私分離

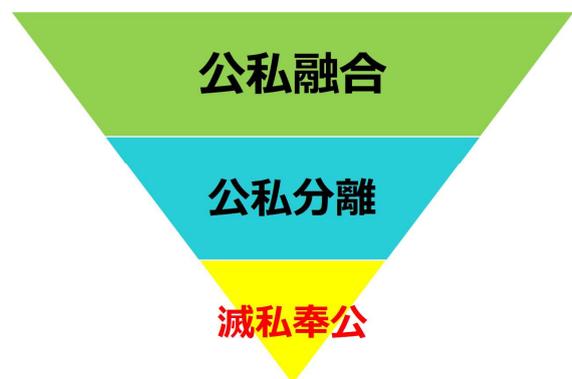
ヒト・モノ・カネの公私混同は、もちろん論外ですが、時間に関しても、就業中は集中して仕事に励み、終業後はさっと私的な時間に切り替えるのが原則。ドイツ企業の生産性が高い要因の一つです。

その我が国の事例は“GHQ”。連合国軍総司令部ではなく、Go Home Quickly! 「働き方改革」の草分け企業、キヤノンの標語です。無借金経営を実現し、飛ぶ鳥を落とす勢いだった当時の御手洗社長(現会長)に、某セミナーでその質問をしたところ、「全力で働いたら、酒を飲む余力はないはず」と解説。それでも会社のカネで呑む社員はいるでしょう？と絡んだら、「誰と呑んだか申告させる」との答。コミュニケーションが目的なので、「日常つき合いない社員との交流なら OK。仲間と呑むなら自腹」という解説に、会場は苦笑と哄笑の坩堝。

### 段階3: 公私融合

「肉体労働」や「事務労働」とは違い、「知恵」を生み出すための「頭脳労働」は、基本的に公私の分離が不可能。特に、その究

### E-3 ワークライフ・バランスの段階



極たる「創造性」は、先のコラム(3-3)にも書いたとおり、働いているのか、遊んでいるのかわからないような、公私が渾然一体となった状態で突然生まれます。

その海外事例は、シリコンバレーのグーグル本部。ここのコンセプトは、まさしく「公私融合」そのもの。また我が国でいえば、糸井重里氏率いる株式会社ほぼ日。同社のユニークな働き方は、生み出す商品ともども、多くの若者の支持を集めています。

生活者の関心の中心が「モノからコト」に移って、すでに四半世紀近く。製品やサービスの供給者の立場を離れ、社員全員が生活者として社会を見つめ直し、その感性を高めるための「公私分離」は、企業が生き残るための必要条件です。

さらに企業が将来を見据えたとき、必須なのは「イノベーション」。明日の社会をイメージし、その中で自分たちが関与すべきコトを考え、実際に将来それを提供できるか？それは、個人および組織の豊かな「ビジネスキャリア」と、「私生活」の幅と深みの「公私」の「分離」と「融合」で決まります。その標語は、昔の「滅私奉公」を思わせる「一億総活躍」ではなく、「よく働き、よく遊び、よく学べ！」

2019年8月16日(初出平成30年1月8日) 実空